

陶淵明における「夕暮れの山」の表現についての一試論

増野弘幸

陶淵明は自宅について多くの作品で触れ、「吾亦愛吾廬

(吾れも亦吾が廬を愛す)」「(読山海経・其二)と述べる様に、

自分の家に対して愛着を持っていることがよく理解される。

その自宅の庭の表現の中に、自らの心境を込めているので

はないかという点について、以前、考察を試みたが、⁽¹⁾「帰

去来兮辞」、「飲酒」其五では、庭について述べ、続いて夕

暮れの山について述べており、いずれもその山を庭から眺

めている。後述する様に、庭と山とが一体感を持って述べ

られていると考えられる点から、こうした山の表現にも何

らかの意味があるのではないかと考え、庭の表現の考察の

延長として考えた場合、どの様に読み取ることが出来るか

について、ここで試みとして論じてみたい。

様に述べられている。

園日涉以成趣 園は日に涉りて以て趣を成し

門雖設而常閑 門は設けたりと雖も常に閑ざせり

策扶老以流憩 扶老を策つきて以て流憩し

時矯首而遐觀 時に首を矯げて遥かに観る

雲無心以出岫 雲は無心にして以て岫を出で

鳥倦飛而知還 鳥は飛ぶに倦みて還るを知る

景翳翳以將入 景は翳翳として以て將に入らんとし

撫孤松而盤桓 孤松を撫して盤桓す

ここに揚げた部分の前では、彭沢の県令を辞し、十三年に互る役人世界との関わりに別れを告げ、本来の望みであった自宅での農耕生活に戻る為、自宅に帰りついて門に入った時、庭の様子が「三径就荒、松菊猶存(三径は荒に就けども、松菊猶存す)」という、荒れた中に松と菊が残っている状態であったと言う。

庭から眺めた山の表現について「帰去来兮辞」には次の

以前の論考において、この事については、大略、次の様に述べた。⁽²⁾ 右の表現は、本来の志と異なる無理な生活を続けた為に荒れてしまった自分の心を諭えていると考えられ、それに続く、ここに掲げた部分の初めの一句「園日涉以成趣」では、自宅に戻って日を過ごすうちに、次第に心が癒されて来ることを、庭が趣き深くなつてゆくという表現で比喩的に示していると考えられる。この様な指摘を行ったのだが、その庭を散歩する時に山を見ると、鳥はねぐらへと帰って行く様子が見え、太陽は沈もうとし、自分は一本だけ生えている松を撫でつつ、その場を立ち去り難く思うと述べている。

鳥がねぐらに帰る頃は時刻であり、次の夕陽が沈んでゆく句とは時間的に繋がっている。従つて、山が夕暮れてゆく様子を眺めている訳だが、その時に、一本だけ生えている松を撫でている。その松については、孤高を保とうとする陶淵明自身の象徴であることが、呉師道等によつて指摘されている。⁽³⁾

「飲酒」其五には次の様に述べられている。

採菊東籬下 菊を採る東籬の下

悠然見南山 悠然として南山を見る

山氣日夕佳 山氣日夕に佳く

飛鳥相与還 飛鳥相与に還る
東の籬の下で菊を摘み、ゆつたりと南山を眺めると、山の気配は夕暮れ時に素晴しく、飛ぶ鳥は、山のねぐらへと帰って行く⁽⁴⁾と述べている。この部分の前の四句では、自分と俗世との関係について述べられており、ここに掲げた部分は、自分の家、特に庭とそこからの景色が中心となつて

いる。
この庭を舞台とした表現において、まず菊が示されるが、後述する如く、菊は自らの高潔さを象徴するものとして陶淵明の詩に用いられているものであり、「菊を採る」行為が菊に纏わる伝承的靈性を身に帯びんとする行為であると考えられることは以前に論じた事である。⁽⁵⁾ それを手にしたまま眺める南山については、三句に互つて述べられている。「帰去来兮辞」、「飲酒」其五いづれも庭から山を見ることを言い、その時間は夕暮れ時である。その光景に対し、「飲酒」其五では、菊を手にしたまま「山氣日夕佳」と言い、「帰去来兮辞」では「撫孤松而盤桓」と、孤松を撫でつつじつと見入つてその場を立ち去り難く思う⁽⁶⁾と言ひ、いづれも非常に思ひ入れを込めた言ひ方をしている。

二作品の共通点をまとめると次の様になろう。

○庭での事を述べ、次に山について言う。

○山を見ながら、松・菊という高潔さの象徴物として扱われる植物を手に行っている。

○時間帯は夕暮れ時である。

○山のねぐらに帰る鳥が詠ぜられている。

○山を見ることに特別な感懐を込めた言い方をしている。

両作品の成立時期については、「帰去来兮辞」が作られたのは、陶淵明が彭沢の県令を辞し郷里に戻った四十一、

二歳の頃であることは諸家ほぼ一致する所であるが、「飲酒」

其五の制作時期については、「飲酒」二十首がまとめられた

時期が、「帰去来兮辞」と同じ頃から五十三歳頃と説が

分かれ、更に序文にも、折に触れて書きつけたものをまと

めたものであると述べられ、其五が何時作られたのかは特

定出来ない。従つて二作品が同じ頃に作られたかは不明で

あるが、前述の如き共通点から考えるならば、「飲酒」其

五が「帰去来兮辞」より後に作られたとしても、役人生活

を辞したこと自体に対する思いの濃淡の差はあるかも知れ

ないが、帰郷後の生活における心境を示そうとしている点

は共通していると考えて良いのではないだろうか。

この二作品において、夕暮れの山に対して思い入れのあることを示す表現が存在していることは、夕暮れの山が何らかの意味を持っている可能性があることを示しているの

ではなかるうか。

そこで次章では、まず「夕暮れ」または「夕陽」について考えてゆきたい。

二

「帰去来兮辞」の夕陽について、呉淇は次の様に指摘する。⁽⁹⁾

景翳二句、此言帰去来之時、年已老矣。

(景翳の二句、此れ帰去来之時、年已に老ゆるを言ふ)

ここでは、夕暮れの表現が、陶淵明自身の老いを示しているものであると言うのであるが、他の作品にも同様の例が見られる。

「采木」には、次の様に述べられている。

晨耀其華 晨には其の華を耀かすも

夕已喪之 夕には已に之を喪ふ

人生若寄 人生寄の若く

顛頼有時 顛頼時有り

ここでは、木槿の花が朝には美しく咲くが、夕暮れには凋んで美しさが無くなると同じく、人生も仮の宿りで、やがて老い衰えるのだと言う。朝は若く潑刺とした時期、夕暮れは老い衰える時期と認識していると見える。

「雑詩」其一にも、次の様に言う。

盛年不重来 盛年重ねては来たらず

一日難再晨 一日再晨なり難し

若く盛んな時が二度は来ないのは、一日で二度朝がやって来ないのと同じであると言うが、ここには夕暮れが老年であるとの認識が含まれており、これも同様の発想を持つものである。

「閑情賦」には次の様に述べる。

悲晨曦之易夕 晨曦の夕れ易きを悲しみ

感人生之長勤 人生の長勤なるを感ず

同一尽於百年 同一に百年に尽くるに

何歛寡而愁殷 何ぞ歛び寡くして愁ひ殷きや

ここでは、人の一生は短いのに苦しみばかりが多いことを嘆いているが、朝日がすぐに夕暮れとなってしまうという表現で、人も若い頃からすぐに老境に入っていることを述べ、夕暮れが人の老いを示すものとして扱われているのである。こうした、夕暮れが人生の老年に当たるとの認識は、『楚辞』に見える、「遲暮」の語が年をとることを示す言葉であることから、古くからのものであることが理解される。

『楚辞』離騷には次の様に述べられている。
惟草木之零落兮 草木の零落を惟ひ

恐美人之遲暮 美人の遲暮を恐る

〔王逸注〕

君不建立道德、挙賢用能、則年老耄晚暮而功不成、事不遂也。

（君道德を建立し、賢を挙げ能を用ひざれば、則ち老耄晚暮にして功成らず、事遂げず）

ここでは、王逸の注によれば、君主が正しい政治を行わねば、年老いて晩年となっても功績があらぬことを言うのだが、「遲暮」は王注にも「老耄晚暮」と説明する如く、人の老いを夕暮れと同様に認識する語である。

同じく「離騷」に次の様にある。

日忽忽其將暮 日は忽忽として其れ將に暮れんとす

〔王逸注〕

日又忽去、時將欲暮、年歳且尽。言已衰老也。

（日は又忽として去り、時に將に暮れんとし、年歳且に尽きんとす。己の衰老せるを言ふ）

ここでは、日が忽ちに暮れることで、王逸によれば、自分が老い衰えることを述べているのであるが、この部分や「九歎」に見える夕暮れの表現について、森博行は、太陽の移行が時間の推移を表わす発想の淵源が『楚辞』にあるとし、日が西に沈むことは老いゆくことを意味すると述べ

ている。¹⁰⁾

こうした用例は、陶淵明に近い時代の他の作品にも見られる。

魏の繆襲の「挽歌詩」には次の様に言う。

朝発高堂上 朝に高堂の上を発し

暮宿黄泉下 暮れに黄泉の下に宿す

白日入虞淵 白日虞淵に入り

懸車息駟馬 車を懸けて駟馬を息はしむ

死ぬことはあたかも日の没する地である虞淵に太陽が沈む如くであると述べるが、人の死を夕陽が沈むことに喩えているのである。

同じく魏の阮籍の「詠懷」其四には次の様に言う。

朝為媚少年 朝には媚しき少年為れども

夕暮成醜老 夕暮には醜老と成る

歲月は止まること無く、朝には美しい少年が、夕暮れには醜い老人になると言い、老いと夕暮れとを同様な事として捉えている。

西晋では、陸機の「予章行」に次の様に言う。

寄世将幾何 世に寄ることを將た幾何ぞ

日昃無停陰 日昃きて陰を停むる無し

この世に寄寓するのは短い間であり、日は傾いて陰を止

めることも無いとして、老いに向かうことを日が傾くという表現で表している。

同じく西晋の劉琨の「重贈盧諶」には次の様に述べている。

功業未及建 功業未だ建つるに及ばざるに

夕陽忽西流 夕陽忽として西流す

晋朝復興の夢がまだ達成されないうちに、自分は早くも年老いてしまったと言うが、ここでも老いることを夕陽に喩えているのである。

以上の如く、『楚辞』に由来する夕暮れや夕陽を人の老いの比喩とする流れは、森博行も魏晋の「夕陽」は楚辞的觀念から余り脱していないと指摘する如く、六朝になっても引き継がれ、陶淵明もまた、その様な表現の流れの中で、夕暮れや夕陽を老いを示す比喩として扱っているのである。

三

次に「山」また「山を見る」表現について考えてみたい。「飲酒」其五の「悠然見南山」について蘇軾は次の様に述べている。¹²⁾

因採菊而見山、境与意会、此句最有妙处。近歳俗本皆作望南山、則此一篇神气都索然矣。

（菊を採るに因りて山を見るに、境と意と会するは、

此の句の最も妙有る処なり。近歳の俗本皆南山を望むに作るは、則ち此の一篇の神氣都て素然たり)

ここでは、テキストに「見」を「望」とするものがあることに関わって見解を述べているが、山を意図的に「望」んだのでは無く、偶然「見」えて、その様子が心情と合致したとする方が良いと述べており、この様な見方は、例えば陶澗⁽¹³⁾や近年の李前程⁽¹⁴⁾の所説等にも引き継がれている。

この見解に基づいて考えるならば、後述する如く俗世との境界を示す「籬」を詠ずることで、自分のいる庭が俗世とは異なつた清浄な場所であることを示し、その庭で自らの高潔さを象徴する比喻物としてその菊を摘んで手に持つ表現がなされた後に、山を見て「山気日夕佳」と夕暮れの山の素晴しさを言う点から、高潔さを意識しつつ南山を見ると、その精神と山の様子が一致したと解することが出来る。よう。

さらに、陶淵明自身、「帰園田居」其一で次の様に述べている。

少無適俗韻 少くして俗に適ふ韻無く

性本愛邱山 性本邱山を愛す

自分は若い時から俗世に合う氣質が無く、本来の性質として山や丘を好んでいたと述べている。この「邱山」を「自

然全体を指す」と解する説もあるが、この詩の後の部分に

「守拙歸園田(拙を守りて園田に帰る)」という表現があることから、むしろ俗世から離れて帰隱したいとの気持ちをも、山に託して象徴的に示している言葉と解することが出来る。後述の如く、山は当時、隱棲の対象となつていた。

こうした点からも、山は自らの生活と密接に関わつたものであり、その山を見るといふ表現を用いて、自分の心情を示そうとしていると理解出来るのではないだろうか。

さらに、陶淵明が山を見ている場所は、陶淵明の自宅の庭である。この庭については以前にも論じたことである⁽¹⁵⁾が、論証の関係でその意味について簡略に示しておきたい。

帰隱後、自宅に戻り躬耕生活をする陶淵明は家について「歸去來兮辭」の中で次の様に述べる。

門雖設而常關 門は設けたりと雖も常に閑ざせり

この様に自宅の門はいつも閉じられている。この閉じられた門と内部については次の様に述べられている。

白日掩荆扉 白日に荆扉を掩ぢ

虚室絶塵想 虚室に塵想を絶つ

(帰園田居・其二)

・戸庭無塵雜 戸庭に塵雜無く

虚室有余閑 虚室に余閑有り

ここで言う様に、昼間から閉じられた門の内部は、俗塵の汚れの無い清らかな場所なのであり、それ故、「止酒」にも次の様に言うのである。

歩止華門裏 歩むは止だ華門の裏のみ

この様に、俗世は歩かず、ただ清浄な自宅の中のみを歩くのだと述べる。陶淵明にとつて、自宅は門によつて俗世と隔絶された清らかな場所、自らの志に叶つた理想的な場所であつたのであり、また、その事でそこにいる自分自身も俗世間との繋がりを断つて高潔な精神を持つていることを示しているのである。

そして、その庭にある植物として複数の作品に互つて示されているのは、菊・松・蘭という、人格の高潔さを象徴的に述べるための植物であり、陶淵明自身の高潔さを、これらの庭の植物によつても示している。

この様な事を論じたのであるが、こうした庭の中から山を眺めているのである。「飲酒」其五の「採菊南山」の二句で言へば、まず、区切られた空間であることを印象づける語として、境界を示す「籬」が示され、その内側に咲く菊があり、それを摘むことで俗塵の汚れの無い場所にいる高潔な自分の姿を示し、次の句で山を眺めるのである。

斯波六郎は、南山の夕景色を眺めることで自分の心に喰いこんでゆく気持ちを表わそうとしたのであり、淵明と南山が一体となる境地を述べ、南山と融合していても、それは自己を眺めることであり、南山を自分の影として見ていると⁽¹⁷⁾し、斉益寿も、南山は陶淵明の生命と一体をなし、南山を見ることは陶淵明自身を見ることであると⁽¹⁸⁾している。

小尾郊⁽¹⁹⁾や李文初⁽²⁰⁾によれば、山は隠棲の場所というイメージが当時の人々にとつては強くあり、そうであるならば、隠棲の場としての自宅と山とに一体感を持つているが故に、この様に庭と山とが連続して表現されているのであろう。「山を見る」という表現は、陶淵明自身に連なる表現であり、自己の投影としての山を見ることで、山と自分の志また生活のあり方とを重ねていると言えよう。その様に考へるならば、先に述べた、籬の中で菊を採るという自らの高潔さを示そうとする表現と、自らの隠棲の志を述べようとする山を見る表現との繋がりがあることになると言へるのであろう。

この様に、陶淵明における「山を眺める」行為は、自らの隠棲の志を山によつて示そうとする表現であると言えよう。

陶淵明自身の俗世における生活において、自らが居住す

る地がどの様な意味を持っているかについては、「飲酒」
其五にも次の様に述べられている。

結廬在人境 廬を結びて人境に在り

而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し

問君何能爾 君に問ふ何ぞ能く爾ると

心遠地自偏 心遠ければ地自ら偏なり

俗世の中に暮らしながらも、自分の居住する土地のみは、
その俗世の塵埃から隔絶され、あたかも辺鄙な場所の如く
になり、隱棲にふさわしい場所になっているのだと述べて
いる。前述の如く、当時は隱棲にふさわしい場所は山中と
の認識があつたことから考えると、詩中に「偏」の語が使
われている意味は、自分が俗世との関わりを絶つて暮らす
ことが、あたかも山中に隱棲するのと同様の意味を持つと
の認識を示そうとしたとも考えられよう。

この様に、陶淵明の自宅と、そこから見える山とは共通
した意味を持っているのである。

そして、「飲酒」其五、「帰去来兮辞」において、見える
山の表現に共通している事は、その山が夕暮れの中で詠ぜ
られている点である。そこで、自らの志を示す山を言うに
当たり、夕暮れを述べることがどの様な意味を持っている
のかという事を考えなければならぬであろう。

夕暮れについては前章において述べた様に老いを示す比
喩として、当時用いられていた表現であつた。従つて、こ
の二例における夕暮れの表現も、こうした認識で用いられ
ている可能性があるのではなからうか。次章では、その点
について考えてみたい。

四

陶淵明自身は、自らの老いを感じる年齢について、どの
様に述べているのであろうか。

「榮木」の序には、次の様に述べられている。

榮木、念將老也。日月推遷、已復九夏。綏角聞道、白首無成。(8)

(榮木は、將に老いんとするを念ふなり。日月推遷し、
已に復た九夏。綏角にして道を聞くも、白首にして成
る無し)

「榮木」の詩は、老いてゆくことへの感懷を述べたもの
で、幼少より道を学んだが、白髪の頃となつても何も大成
していないと言う。詩の後半部分には「四十無聞、斯不足
畏(四十にして聞こゆる無くんば、斯れ畏るるに足らず)」
とあり、この詩が四十歳に近い頃に書かれたものであるこ
とが示されており、四十歳近くが、老いの至る頃との認識
があつたと言える。

また、「戊申歳六月遇火」では次の様に述べている。

総髮抱孤介 総髮より孤介を抱き

奄出四十年 奄ち四十年を出づ

形迹憑化往 形迹化に憑りて往くも

靈府長独閑 靈府長く独り閑かなり

幼小より孤高を守り、たちまち四十歳を過ぎ、肉体は衰えたが、精神はいつまでも変わらないう。この詩は四十四歳の時の作で、ここでも肉体的な老いについて触れられている。

「雑詩」其六には次の様に述べられている。

昔聞長者言 昔長者の言を聞くに

掩耳每不喜 耳を掩ひて毎に喜ばず

奈何五十年 奈何ぞ五十年

忽已親此事 忽ち已に此の事を親らせんとは

ここでは、若い時は老人の言葉を聞きたがらなかつた自分が五十の老人となつて昔の老人と同じ事をしていと言うが、五十歳が老人との認識があつたことを示している。

同じ頃の作と思われる「雑詩」其七でも、髪が白くなつてしまつては、仮の宿りであるこの世を去る日も近いと述べており、「与子儼等疏」も、子への遺言として五十一歳の時に書かれたものである。

この様に、陶淵明の場合、四十歳に近い頃から老いを意識し、五十ともなれば老人となり晩年に近付いたとの認識を持つていたと言える。

こうした老境を意識する年齢は、頂度、「帰去来兮辞」、「飲酒」其五が作られた頃に当たると言えよう。

五

以上の様な老いに対する認識に基づいて「夕暮れの山」について考えてゆきたい。

「帰去来兮辞」、「飲酒」其五は帰隱後の作品であり、即ち、四十一、二歳以降の作である。先程見た如く、その頃には陶淵明自身が老いを意識した作品が書かれている。この二作品に現れる「山」は、陶淵明の、俗世との関係を絶ち切つて隠棲しようとする志を示すものであり、山が陶淵明と同一化されているとも言えるものである。

その山の詠ぜられる時間は二作品共夕暮れ時である。夕暮れ時は、老いを示す比喩的表現として用いられるものであり、陶淵明にとつて、老いを意識し始める年齢は四十歳頃、頂度、役人生活を辞して郷里に戻つた頃なのである。

こうした事から、二作品において、自らの志を示す山が詠じられる時間帯が夕暮れ時であるのは、郷里に戻つて自

分の願ひ通りの生活をしている自らの年齢を示そうとしているのであり、自分の志に叶つた生活が、人生の夕暮れ時になつてから行える様になつたことを述べていると考えられるのではなからうか。

「帰去来兮辞」においては、夕暮れの山を眺めながら、一本だけの松を撫でてそこから立ち去り難いと感じると述べることは、次の様に考えられよう。役人世界と関わりのあつた二十九歳から四十一歳迄の期間の心情、それは、この作品にも述べられている「自以心為形役（自ら心を以て形の役と為す）」即ち、生活の為、自分の本来の志を曲げて肉体の下僕としていた苦しいものであつた。そうした状態から解放され、本来の志に叶つた生活に四十一歳以降入るのだが、それは人生で言えば夕暮れの時であり、太陽が次第に沈んでゆくことで、次第に自分の寿命が尽きてゆくことを示している。その時、自らの高潔さを示す庭の一本の松を撫でてその場を立ち去り難く思うと述べることで、「飲酒」其四において、自分を比喩的に示す鳥が一本だけ生えている松に身を寄せて生涯離れないと述べることと同じく、⁽²⁾以前の様な俗世との関わりを持つ生活に戻ることは無く、寿命の尽きる迄、自らの志に叶つたこの生活を続けるのだという決意を表明していると考えられるであらう。

「飲酒」其五においては、庭の菊を摘んで手にしながら山を見ている。その山の気配は夕暮れ時に素晴らしいと述べているが、この事は、俗世との関わりを絶つて高潔に生きようとする自らの理想に合つた生活を送っている、人生で言うならば夕暮れ時に当たる今現在が、大変充実し素晴らしいものであるとの実感を、山の夕景色が美しいということに託して述べていると考えられるのではなからうか。

この様に、二作品において、夕暮れ時の山が詠じられているのは、人生の後半に入って、やつと自分の納得出来る生き方に戻ることが出来た素晴らしさを示そうとしている様に理解することも出来るのではないだろうか。

「飲酒」其五では、山の表現は自然を示すもので、その自然と一体となつて生きる素晴らしさを述べていると説明されることも多く、確かに、その解釈はそれに続く二句「此中有真意、欲弁已忘言（此の中に真意有り、弁せんと欲して已に言を忘る）」の理解において、より深味を持たせるものと言える。本稿では、庭に込められた作者の意図を探るといふ観点の延長上で、それと一体感を持って示されていると考えられる夕暮れの山の表現について考察を行つて来たが、この様な観点から考えた場合は、ここで述べた理解も可能であると思われるのである。

注

- (1) 拙稿「陶淵明における庭の表現について」(『新しい漢字漢文教育』第三十五号) 参照。
- (2) 前掲(1) 論文。
- (3) 好言孤松(中略)皆以自況也。(吳師道『吳礼部詩話』(『歷代詩話統編』所収))。
- (4) 前四句の原文は本稿第三章参照。
- (5) 前掲(1) 論文。
- (6) 他に袁行霈等、陶淵明の生年をより早い時期と捉え、県令を辞し「掃去來兮辞」を作ったのは五十四歳の時とする説もある(袁行霈著『陶淵明集箋注』(中華書局、二〇〇三年)八五七〜八五八頁)が、本稿では大方の見解に従っておく。
- (7) 「飲酒」二十首の成立時期については、三十九歳から五十三歳迄説が分かれるが、三十九歳説の遼欽立は「陶淵明事迹詩文繫年」(『陶淵明集』(中華書局、一九八七))において、「飲酒」其十九に「是時向立年」とあり「亭亭復一紀」とあることから、「一紀」を十年として、三十九歳とするが通例として、「一紀」は十二年であり、やはり四十一歳以降の成立と考えるのが妥当であろう。
- (8) 紙墨遂多、辞無詮次。
- (9) 吳淇『六朝選詩定論』卷十一(北京大學中文系等編『陶淵明資料彙編』下冊(中華書局、二〇〇四年)所引参照)。
- (10) 森博行「魏・晋詩における「夕日」について」(『中国文学報』二十五)。
- (11) 森氏前掲(10) 論文。
- (12) 『東坡題跋』卷二。
- (13) 『靖節先生集』卷之三。
- (14) 「浅析陶淵明《飲酒》第五」(『中華文史論叢』六十九)。
- (15) 例えば、孟冬は「丘山指大自然」とする『陶淵明集訳注』(吉林文史出版社、一九九六年)五十六頁)。
- (16) 前掲(1) 論文。
- (17) 『陶淵明訳注』(九州中国書店、昭和五十六年)六二〜六三頁。
- (18) 「論陶淵明的内在世界」(『中国古典文学研究叢刊 詩歌之部(一)』(巨流図書公司、一九七七年))。
- (19) 「六朝文学に現はれた山水観」(『中国文学報』八)。
- (20) 李文初「《中国山水詩史》導論」(『暨南学報(哲学社会科学)』一九九〇年第二期)。
- (21) 弱質与運頰、玄鬢早已白、(中略) 家為逆旅舍、我如当去客。
- (22) 栖栖失羣鳥、(中略) 因值孤生松、斂翮遙來帰、(中略) 託身已得所、千載不相違。
- (大妻女子大学)